

緒 言

分化論という名称の書物を言語研究の分野では見たことがない。とはいえ、ことさら新奇さを狙ったわけではなく、従属節と主節の範疇同一性（と非対等性／対照性）という謎を解決する糸口を探していて、二十年以上前に公表した論文のなかで名詞修飾のありようを説明するために仮定した構造は分化を原理とするという概念化が役に立つのではないかと気づいたことによるものである。

この仮定は名詞修飾の研究では比較的うまくいき、そのころ有望だと感じていたが、ほぼ着想にとどまっており、今回従属節に適用するにあたって一から概念系を構築することになった。一つの領域で概形が見えてきて他のところに手を広げると、もとの領域の重要な部分を更新することが必要になり、あらあら書き上げたものを解体してというようなことが続き、対応するための工夫として小さく切り刻んだ概念によって全体を組み上げるという方式を採った。それぞれの条項は短く一行に満たないものが多くなっている。これによって、広範な更新が必要に見えても一つの条項の変更だけで済むといった、更新のかかわる範囲の特定と実際の変更作業が容易になった。一つ一つの条項の明瞭さが増し、その関係も見やすくなるという効果も実感できる。また、用語は対象にかかわる専門的なもの以外、大学2年までの学習で、もしくは日常生活で身に付く語をなるべく採用するようにした。先行研究があればそういうわけにいかないが、分化を論じる研究がなく、比較的自由に用語を選ぶことができた結果である。

名詞修飾、文、従属節という研究対象を分化する構造という概念化で捉えることは、見た目の逆を言うかのような趣がある。言語表現を構成する過程は要素を結合することだが、それが分化を実現するものになっているということであるから。名詞修飾や文における項と述語の配置は限られた少数のものしかなく、そのように限定されることが構造が分化を原理とするという仮定によって説明される。従属節と主節の範疇同一性は、分化であるから当然のことである。非対等性／対照性も当然のことである。分化を原理とする構造という概念化は申し分ない結果を伴うのである。

しかし、現実の文には他の様々な要因がかかわり、それらが解明されなければこの概念化も力を発揮しない。例えば、余りは統語論で論じられたことがないが、これがなければ構造を正確に捉えることはできない。設定と劣後は技巧的なものに見えかねないが、重要な役割を演じる場面が複数あり、言語の何らかの真実に対応するものであると考えられる。構造の配置には使いまわしと本来的なものとの区別があり、使いまわしは何らかのコストを払って使われ、そこに劣後がかかわる。分化を中心に様々な要因がかかわりあって言語表現が出来上がるが、要因同士の秩序もある。

研究を進めるうえで対象についての妥当な仮定と正確な観察は必須のものである。この研究ではいくつかの仮定を導入し、それで初めて捉えられる現象を取り上げている。このようなときに、基本的な仮定を妥当なものにすることは極めて重要である。何も仮定がなければ研究は始まらず、仮定次第で結果は大きく影響を受けるのだから。例えば、量化は分化のとおりであるという結論は、述語を述語のまま量化することにかかっている。量化に関する基本的な想定——量化は（変）項に適用される——は使いやすく便利だが、こと言語に関しては不都合である。

詳しくは本編でということになるが、全体は概念的把握にとどまってい

る。規則を立てて実装を行うことがあればその過程で新たな課題が発生し、修正を余儀なくされるといったことは避けられないだろう。ともあれ、一通りのまとめりとして提出する次第である。

本文中でも触れるが、表示の方式や一部の用語について注意を喚起するためにここに掲げる。

表示

- 〈 〉 …… ①分化の資材または分化そのもの（範疇の成員、
範疇の成員によって実現した分化、分化によっ
て実現した分化、上位の階層の範疇の成員が下
位の分化を再現して現れたものなど）
②言語が想定する世界とそれを構成するもの。〈世
界〉、〈事象〉など。〈事象〉は分化でもある。
同じ用語で〈 〉がないものは言語の側ではない。
- [] …… 素性の成員
- $p \rightarrow q, p, q$ …… 文の表す命題（に対応する論理式）
- M …… 上の場合の〈モダリティ〉の成員
- $i, j, k, l, 685214639,$ …… 範疇の成員や素性の成員の識別のための標識

用語

- 分化 …… ①構造を律する原理
②分化を原理として生まれた構造

1. この研究について

「分化論」と名付けたこの研究は主要な内容として名詞修飾、名詞述語文、従属節と主節の関係、これらに関わり合いを持ついくつかの事柄の分析などを含んでいる。名詞修飾と名詞述語文の関連は想像しやすいが、従属節と主節の関係は縁遠く見えるだろう。これらをつなぐのが、構造が分化を原理とするという概念化である。名詞修飾の研究の中で得られたもので、名詞述語文に密接なかかわりを持つのは明らかで文全般にも容易に拡張されるが、従属節と主節の間関係にまで及ぶというのは驚きかもしれない。しかし、それはこの関係の一つの謎を解決するために何としても必要なのである。ただし、その適用には乗り越えなければならない障害もある。

従属節について回る疑問の確認から始める。

2. 従属節にかかわる疑問

ここで言う従属節は南(1964a, 1964b, 1974, 1993)などで言う従属句を言い換えたものである。それは条件節や原因・理由節や目的節など従属結合に携わるとされるものだけでなく、テ節や連用形節やシ節など等位結合を作ると分類されるものも含み、さらにナガラ節・ツツ節・テ₁節・連用形

反復節・形容詞連用形₁節などの付帯状況を表す従属節A類も含み、範囲は subordinate clauses に等位結合の節を加えたものより広い。

従属節を統一的に捉える観点は、南(1964a, 1964b, 1974, 1993)などで貫かれている、従属節に含まれる述語的部分の要素と述語以外の成分の範囲の広狭として現れた従属節の区分と階層性である。従属節はA類、B類、C類の三類に分けられ、この順に述語の要素と述語以外の成分の種類が豊富になり文に近づいていく。A類の従属節には、例えば主格の主語と〈時制〉の形式が現れないが、B類の従属節にはA類に現れるすべてに加えてこれらが現れ、C類の従属節にはB類に現れるすべてに加えて〈話題〉などや〈モダリティ〉の形式も現れる。それぞれの例を引用すれば次のようである。

A類

(0001) 髪をふりみだしてとびかかる。

(0002) 彼は、頭をかきながらあやまった。

(0003) ふんがいた彼は、足音も高く立ち去って行った。

(以上3例、南1964a: 76)

B類

(0004) 戸をしめて、出て行った。

(0005) とき子ちゃんがいなければ、俊夫さんに頼んどけばいいわよ。

(0006) せっかく買ってやったのに、ちっとも使わない。

(以上3例、南1964a: 77)

C類

(0007) M君は「俺はいやだ」と言うし、N君もまよっているようだったよ。

(0008) まさか荷物が途中で紛失したということがありますまいが……

(0009) 彼はたぶん来るだろうから…… (以上3例、南1964a: 77, 81)

例(0008)と例(0009)では従属節に後続する部分が上の引用のようになっているが、そこで口ごもるといったことではなく、単に後続節を書く手間を省いたということであろう。また、(0005)には(南1964aの取扱いにも関わらず)C類の可能性もある。A類には例(0003)の「足音」のように主語が生起することがあるが、主格の主語ではない。

(0010) *ふんがいた彼は、足音が高く立ち去って行った。

主格の主語がある「足音が高く」はB類になり、例(0010)のままではこのB類の従属節と他の部分との関係が良くない。

従属節各類の内容の違いは南(1993)では次ページの表にまとめられている。それぞれの類に現れる成分と要素の範囲の違いと、それが階層をなすことは、+ (その成分や要素が出現することを表す) が三つの段階をなして山型に分布することから明確に読み取れる。従属節の研究はこの内部に現れる成分と要素の範囲の違いによって従属節が三分されるという発見に始まり、直ちに階層性と結びつけられている。

従属節の階層は、述語の要素の前後関係といった支持する他の事実や¹、階層にかかわる先行研究²もある中で、文における階層として落ち着きどころを得る。しかし、ここに一つ不思議がある。従属節が主節の中のそれと同じ階層に関係しなければならぬことである。これを同一性と呼ぶことにする。

1 渡辺(1953)。

2 南(1964a, 1964b)に先立つ研究としては、南(1993)の挙げる林(1960)、金田一(1953)、渡辺(1953)、芳賀(1954)、服部(1957)などがある。